

RIST創立30周年に寄せて

RISTシニア会員
森 祥一



凡そ25年ほど前に、RISTと言う名称を最初に聞いたときに、どんな機関か想像できませんでした。その活動が科学と技術の融合と言う趣旨に接して、あまり類を見ない活動と思いました。その後RISTが主催する講演会等に出来るだけ参加しました。RISTの構成は産学官より出来ていますが、講演会などの多くは、どちらかと言うと、産学官の中で、学側に重点を置き、熊本県下の製造業に対して、色々の研究や、その結果を県下のRIST会員や会員企業へ広める事に重点を置いた活動と理解しています。

それらの中の幾つかの事が県下の会社が実現化して、ビジネスへ展開しているという話も聞いています。大変有意義な事ですし、RISTを核にして、そこから熊本にとんでもない商品や会社が出て来て、ビジネスの核になるような方向へ進展する事を期待しています。

熊本の地は、日本の中心からは少し遠い位置にあります。が、“肥後のワサモン”と言われる新しもの好きの県民性と、“肥後もっこす”と呼ばれる、融通の利かない、一度決めたら梃でも動かない一徹な気性もっているところです。

この県民性を生かすには、RIST関係者は斬新な研究結果を県下の関係者へ伝え、“こりゃヨカバ”と信じ込ませて、そこに邁進しようとする気持ちを持たせることにも注力して頂き、数は少なくとも、特異な商品の開発、特異な分野において光る物を持っている会社が育つことを期待しています。

RISTの活動を外野席から観ていると、その活動に産学官の中の、産の分野からの積極的な関りが少ない感じを持っています。産の場合には、今日の飯、明日の飯が当面の課題であり、数年先の夢に力を注ぐ余裕は一部の会社を除き無いというのが実情です。そのような会社群に対するRIST活動へ積極的に参画する方向付け、動機付けなどはこの活動が県下の産業を育成・発展させていく梃になるための仕掛けも重要ではないかと思えます。ある装置製造する会社の社長さんは、“RISTには会費は出したばってん、自分たちが聴いて役に立つような話がなんも無もんな、そっで辞めたい”という話を聴きました。その意味では、“学が強い”科学的なアプローチを技術に転化して、さらに産の方へ上手く流す仕組みがあれば、RIST発のビジネス展開が進むと思えます。

そこで、産の世界で経験したシニアエンジニアの知識や経験を学が持つ科学や基礎技術を産へ展開するような活動をRISTに織り込めると、さらなるRIST活動の発展につながると思えます。

私自身は産の分野で50年を超える期間製造業に従事し、その間に、設計／製造／顧客対応／海外ビジネス展開等々を経験する中で、ビジネスは市場や顧客が望む物に対して、要求機能を満たす良い製品を、適正な価格で提供する事に尽きと思っています。更に追加するとすると、誠意をもって事に当たる事だと思えます。